

## 詩歌を読む

### — 言葉を持つことについて

文学部教授 伊吹 克己

何か良い本を薦めて欲しいという依頼です。これは難しい。長い列車の旅で手に取ったミステリー小説が「良い本」であることも(しょっちゅう)あるし、世界文学史上の大傑作が退屈で(退屈で)「悪い本」になることもあるからです。それが私の場合よくあります。だから、本を薦めるのは難しい。

そう考えて、この本を読み、ということを書くのは止めにしました。読むのではなく、覚える、記憶することを勧めようと思います。それなら本はいらないから、本嫌いの人でもいいでしょう(ちょっと強引ですか)。

私が勧めるのは詩歌集です。それも本には違いありません。でも、詩歌は頭の中に記憶された言葉として残されて初めて作品として完結します(マラルメの詩集はどうなんだ、と言わないでください)。そして、詩歌はたった数行、時には一行で読んだ(そして、覚えた)人の人生に深い陰影をつけるものです。

何よりも、詩歌集を薦めるのは簡単です(だからこれに決めた、ということは否定しません)。短いのが多くて、それを引用すればいいのですから。

というわけで、以下に私の記憶にある詩歌のいくつかを引用してみます。心に触れたものがあれば、その著者の詩歌集を手にとってください。(以下の引用は、いずれも作品の一部分です)

\*

定住の家をもたねば朝に夜にシシリーの薔薇やマ  
ジョルカの花 〈斎藤史「スケルツォ」〉

\*

一編の詩が生まれるためには、  
われわれは殺さなければならない  
多くのものを殺さなければならない  
多くの愛するものを射殺し、暗殺し、毒殺するのだ  
〈田村隆一「四千の日と夜」〉

\*

大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ  
〈寺山修司「恐山」〉

\*

道を急ぐことはない。  
あやまちを怖れる者はつねにほろびる。  
明日をおびやかすその価値は幻影だ。  
〈岡田隆彦「大股びらきに堪えてさまよえ」〉

\*

昼顔の見えるひるすぎぼるとがる  
〈加藤郁乎「球體感覺」〉

\*

言葉は  
言葉に生まれてこなければよかった  
と  
言葉で思っている 〈川崎洋「鉛の扉」〉

斎藤史全歌集—昭和3年~51年 斎藤史著 大和書房 1977

田村隆一全詩集 田村隆一著 思潮社 2000

岡田隆彦詩集 岡田隆彦著 思潮社 1970

寺山修司全詩歌句 寺山修司著 思潮社 1986

加藤郁乎詩集 加藤郁乎著 思潮社 1971

川崎洋詩集 川崎洋著 思潮社 1970